【プレスリリース】

2026年10月14日

細見美術館

巨匠ハインツ・ヴェルナー（メルヘン）の描いた物語

―現代マイセンの磁器芸術―

会期　2026年11月21日(土) ～ 2027年1月31日(日)

薄く堅牢かつ純白で、色絵や染付で彩られた美しい東洋の磁器は、17世紀以降、ヨーロッパで憧れの的となり、各国の王侯貴族や富裕層が競って蒐集しました。18世紀初め、熱烈な蒐集家であったドイツのアウグスト強王のもとでヨーロッパ初の硬質磁器が焼成され、現在のドイツ・ザクセン州にマイセン窯が誕生します。以来、数多くの華やかな名品が世に送り出されてきました。

1960年に創立250年を迎えたマイセン磁器製作所は、5人の気鋭アーティストによって新たな時代を迎えます。そのひとり、ハインツ・ヴェルナー（1928–2019）は、現代マイセンを代表する数々の名作シリーズを生み出しました。

本展では、ヴェルナーが手がけた《アラビアンナイト》《サマーナイト》《ブルーオーキッド》などの代表的なサービスウェアやプラーク（陶板）を通して、その多彩な魅力を体感いただけます。 巨匠ヴェルナーが創り出した、現代マイセンの麗しき磁器芸術をどうぞお楽しみください。



ハインツ･ヴェルナー

ー展覧会概要ー

展覧会名称	巨匠ハインツ・ヴェルナー（メルヘン）の描いた物語ー現代マイセンの磁器芸術ー
会　　期	2026年11月21日(土) ～ 2027年1月31日(日)
開館時間	午前10時～午後5時
休 館 日	毎週月曜日(祝日の場合、翌火曜日)、年末年始(12月25日(金)～1月4日(月))
入 館 料	一般 2,000円　学生 1,500円
主　　催	細見美術館　京都新聞 (予定)
後　　援	京都市内博物館施設連絡協議会
特別協力	アンティークアーカイヴ
協　　力	マイセン磁器日本総代理店 ジーケージャパンエージェンシー株式会社
企画協力	株式会社キュレイターズ
会　　場	細見美術館　京都市左京区岡崎最勝寺町6-3　http://www.emuseum.or.jp

＊会期・ 営業日時等を変更する場合があります。最新情報はWEBサイトをご覧ください。

－展示構成・出品作品－

プロローグ　名窯の誕生

千年以上の歴史をもつドイツ・ザクセン州の古都マイセン。マイセンの地に、熱心な東洋磁器愛好家であったアウグスト強王（1670-1733）が王立磁器製作所を設立したのは1710年のことでした。現在も美しく佇むゴシック様式のアルブレヒト城には、かつて150年もの間、磁器製作所がありました。

アウグスト強王が最初に目指したのは、「白い金」と称された白磁でした。マイセンの近郊には白磁の原料となる良質なカオリンがあり、中国の徳化窯（とっかよう）の白磁のような薄く純白な素地の再現に成功し、ヨーロッパ初の硬質磁器が誕生します。

1720年代には「柿右衛門様式（かきえもんようしき）」の色絵を愛するアウグスト強王の願いが叶い、シノワズリ（中国趣味）の色彩豊かな絵付けにも成功し、1735 年頃から西洋的な器の形とシノワズリの融合が実現しました。連綿とマイセンに受け継がれる西洋的な器の形と東洋的な意匠の融合をお楽しみください。



《色絵龍虎図輪花皿》
肥前有田
1670-90年代
愛知県陶磁美術館



《色絵梅竹虎図皿》
マイセン
18世紀中頃
個人蔵

第1章　磁器芸術の芽吹き

1928年、ドイツ・ザクセン州マイセンの近郊の町コズヴィッヒ。ここで、のちに現代マイセンを代表するデザイナーとなるハインツ・ヴェルナーが誕生しました。

1943年、15歳の少年ヴェルナーは、ドレスデン芸術アカデミーの分校として1764年に設立された伝統あるマイセン養成学校に入学しました。入学後すぐに類まれな絵の才能を見いだされ、厳格な教育を受けたのち、早くも1950年代には絵付師として認められるに至ります。

マイセンの製品は、ライプツィヒ・メッセ（ザクセン州ライプツィヒで開催される見本市）においてデザインが発表され製品化へと進んでいきます。ヴェルナーは、1958年のメッセにて装飾デザイナーとしてデビューしたのち、1960年にはマイセン創立250年にあたって伝統を守りつつも時代に即した新しい創造を生み出すべく立ち上げられた「芸術の発展を目指すグループ」の設立メンバーに選ばれました。

本章では、若きヴェルナーのデビュー作から、「芸術の発展を目指すグループ」のひとりとして歩み始めた直後の1960年代初期の作品を紹介します。





左
《エンゼルフィッシュ》花瓶
マイセン　1958年　個人蔵
装飾：ハインツ・ヴェルナー
器形：ハンス・メルツ

右
《スウィトピーの文様》コーヒーサービス
マイセン　1962年　個人蔵
装飾：ハインツ・ヴェルナー
器形：エアハルト・グローサー、アレクサンダー・シュトルク、ルードヴィッヒ・ツェプナーの共作

第2章　名シリーズの時代

1960年代のマイセンでは、「芸術の発展を目指すグループ」の発足の一方、マイセンの長い伝統を守った製品も求められていました。ヴェルナーは、かつてアウグスト強王の居城であったツヴィンガー宮殿に蒐集されたマイセンコレクション―その中でも絵付師ヨハン・グレゴリウス・ヘロルト（Johann GregoriousHöroldt, 1696-1775）時代のものを熱心に研究したとされます。

そして誕生したのが、ドイツで古くから親しまれてきた文学作品をモチーフとした《ミュンヒハウゼン》です。これをきっかけとし、ヴェルナーは1970年代後半にかけて、物語（メルヘン）からインスピレーションを得た代表作《サマーナイト》と《アラビアンナイト》、さらにはマイセンの自然描写に新風を吹き込んだ《狩り》や《ブルーオーキッド》を始めとした、新たなシリーズを次々と生み出します。

本章では、夢溢れる世界が広がる数々の名シリーズとともに、ヴェルナーの直筆による陶板画なども紹介します。



《アラビアンナイト》コーヒーサービス　マイセン　1966年（1974年以降製作）　個人蔵
装飾：ハインツ・ヴェルナー　　器形：ルードヴィッヒ・ツェプナー



《サマーナイト》ティーサービス　マイセン　1969年（1974年以降製作）　個人蔵
装飾：ハインツ・ヴェルナー　　器形：ルードヴィッヒ・ツェプナー　　人形造形：ペーター・シュトラング





《ミュンヒハウゼン（ほら吹き男爵）》コーヒーサービス　マイセン　1964年　個人蔵
装飾：ハインツ・ヴェルナー　器形：エアハルト・グローサー、アレクサンダー・シュトルク、ルードヴィッヒ・ツェプナーの共作



《ブルーオーキッド》プレート、カップ＆ソーサー　マイセン
プレート：1977年　カップ＆ソーサー：1978年（1987年頃製作）
個人蔵
装飾：ハインツ・ヴェルナー　器形：ルードヴィッヒ・ツェプナー



《狩り》大燭台　マイセン　1973年　個人蔵
装飾：ハインツ・ヴェルナー　彫像：ペーター・シュトラング

モーリッツブルク城のアトリエ

1960年マイセン磁器製作所は創立250年を迎え、ハインツ・ヴェルナーを含むアーティスト集団「芸術の発展を目指すグループ」が結成されました。 1967年かつてアウグスト強王の狩りの城だったモーリッツブルク城にアトリエが設けられ、彼らは周辺の深い森で狩りを楽しんだり、得意な楽器で演奏会を行いながら次々と独創的なマイセン作品を創造しました。彼らのアトリエを象徴する名作に《狩り》シリーズがあります。

ハインツ・ヴェルナーと共に活躍した彫塑家のペーター・シュトラング（Peter Strang, 1936-2022）は文学作品への造詣が深く、魅力的な彫像、人形をうみだします。造形師のルードヴィッヒ・ツェプナー（Ludwig Zepner, 1931-2010）による「グローサー・アウスシュニット」は現代マイセンを代表するフォルムとなりました。絵付師のルディ・シュトレ（RudiStolle, 1919-1996）は、数学と天文学を好み、幾何学的な作風を得意としたグループの長老です。最後に花と果物を得意とした絵付師のフォルクマール・ブレッチュナイダー（Volkmar Bretschneider, 1930-2024）が加わり、5人のグループとなりました。

旧東ドイツ時代、高度な磁器作りの技術と、5人のアーティスト達の豊かな才能によって生み出された作品の数々には、生きる喜びの表現、そして平和への想いが込められました。それらは極めて質が高く、まさに“磁器芸術”と言えるものでしょう。



モーリッツブルク城のアトリエで制作する
ハインツ・ヴェルナー（左）と
ペーター・シュトラング（右）
(『MEISSEN75』マイセン1975年刊行 より)
撮影：Klaus Tänzer（クラウス・テンツァー）

第3章　光と色彩の時代

1973年の日本と東ドイツの国交成立は、日本におけるマイセン製品需要が高まっていく大きな契機となりました。1975年、ついに初来日を果たしたヴェルナーは、日本の美しい風景に魅了され、その後も日本におけるマイセン展に伴いたびたび日本を訪れています。

1980年代に入ると、ヴェルナーのデザインは具象を超え、生命力あふれる美しい色と線や面の共演となっていきます。花、雲、風、ジュエリーから男女の愛まで、多種多様なモチーフを踊るような筆致で描いた作品には、マイセンの内部からも「なんと若い感性か！」と感嘆の声が出るほどだったと言われています。こうした新たな表現を支えたのは、新たな窯の導入や彩色技術の開発などの、マイセンのたゆまぬ技術開発でした。

1981年にはハレのブルク・ギービッヒェンシュタイン美術大学(Burg GiebichensteinUniversity of Art and Design Halle)より名誉教授の称号を与えられ、以後「ハインツ・ヴェルナー教授」として親しまれていくこととなります。

本章では、円熟を見せつつも、常に新しい挑戦に満ちたヴェルナーの作品を紹介します。



《ヴィジョン》コーヒーサービス
マイセン　1990年　個人蔵
装飾：ハインツ・ヴェルナー　器形：ルードヴィッヒ・ツェプナー



《アフロディーテ》コーヒーサービス、プレート
マイセン　1998年　個人蔵
装飾：ハインツ・ヴェルナー　器形：ルードヴィッヒ・ツェプナー



《インプレッション》カップ＆ソーサーほか
マイセン　1985年　個人蔵
装飾：ハインツ・ヴェルナー、
フォルクマール・ブレッチュナイダー
器形：ルードヴィッヒ・ツェプナー

エピローグ　受け継がれる意志

1990年代になると、ヴェルナーはマイセン内でも若いアーティストの育成に力を注ぐ立場として、教え子たちとの共作をいくつも手がけています。

1993年に65歳でマイセンを定年退職した後も創造へのエネルギーは全く衰えを見せず、翌年には彼の集大成とも言える《ドラゴンメロディ》を発表し、さらに1998年には勤続55年を記念して後輩アーティストたちと新作を発表しました。また、日本だけでなく、世界各国を訪れて様々なインスピレーションを受け、幻想的で美しい絵画やグラフィックも描き続けました。

教え子に「マイセンの宝物」とも言われたヴェルナーは、2019年に91歳で逝去する直前まで、マイセンの新作発表カタログに名を連ねていました。

本章では、彼の晩年を辿るとともに、現在のマイセンで活躍する、ヴェルナーの意志を継ぐ気鋭のアーティストたちを紹介します。



《ドラゴンメロディ》コーヒーサービス、プレート
マイセン　1994年　個人蔵
装飾：ハインツ・ヴェルナー　器形：ルードヴィッヒ・ツェプナー



《祝祭舞踏会》コーヒーサービス
マイセン　1994年　個人蔵
装飾：ハインツ・ヴェルナー　器形：ザビーネ・ヴァックス

季節を彩るマイセン

会場には、クリスマスからお正月へ、季節の移ろいを楽しむ特別なコーナーも登場します。年内はクリスマスを彩る作品を、年末の展示替え後には新年を寿ぐ作品をご紹介。

ハインツ・ヴェルナーの名作とともに、冬の祝祭の華やぎをお楽しみください。



本展連絡先
細見美術館　広報担当 大塚 TEL: 075-752-5555(代)　FAX: 075-752-5955(代)　kouhou@emuseum.or.jp

展覧会資料（画像）・取材をご希望の方は、ホームページリリースページ
もしくは左記QRコード「資料・ご取材申込フォーム」からお申込みください。